



2026年 夏号
発行元
大垣市立図書館

7・8・9月の
展示・講座情報

「ハン・カワイ展」
7月1日(水)～
9月23日(水・祝)

ふるさと古文書講座
7月10日(金) 午前
9月11日(金) 午前

ふるさと古文書基礎講座
7月10日(金) 午後
9月11日(金) 午後

学ぶ大垣講座
7月20日(月・祝) 午後
9月23日(水・祝) 午後

大垣いま・むかし



大正時代の御首神社



現在の御首神社

所蔵品展「ハン・カワイ展」はじまる

3階展示コーナーにて開催中



戸田氏庸筆「鐘馗」

中から、不思議さの中にどこか愛嬌のある絵が描かれている資料を紹介いたします。

【開催場所・期間】

大垣市立図書館3階
郷土資料室展示コーナー

令和8年7月1日(水)

～9月23日(水・祝)

午前9時～午後5時まで

休館日：毎週火曜日(ただし、

8月11日、9月22日を除く)、

7月22日(水)、31日(金)、

8月12日(水)、28日(金)



※ポケット学芸員をご利用いただけます。詳細は右記QRコードをご確認ください。

学ぶ大垣講座 はじまります

こちらのQRコードより申込み可能。大垣市電子申請サービス画面が起動します。



※いずれも定員になり次第、受付を終了します。

学ぶ大垣講座は、当館所蔵の郷土資料を通じて、ふるさとの歴史・文化について学ぶ講座です。
今年、(公財)大垣市文化事業団文化創造専門員の鈴木隆雄氏、岐阜協立大学経営学部教授の竹内治彦氏、岐阜女子大学講師の辻公子氏ほか4名を講師に迎えて開催します。皆様、是非、ご参加ください。
今年度も、Zoomによるオンライン配信を実施します。申込は、6月15日(月)から7月13日(月)まで。
会場受講(80名)は電話受付0584(78)2622、オンライン受講(90名)は大垣市電子申請サービスで受付しております。

回	日にち	テーマ	講師
1	7月20日(月・祝)	「食」のある大垣の風景と歴史	鈴木 隆雄氏 (公財)大垣市文化事業団文化創造専門員
2	9月23日(水・祝)	豊臣時代の大垣城主	児玉 剛(図書館職員)
3	10月12日(月・祝)	『城下町から工業都市へ 発電所を築いた人たちの志』	竹内 治彦氏 (岐阜協立大学経営学部教授)
4	11月3日(火・祝)	昭和初期の大垣	坂東 肇(図書館職員)
5	令和9年1月11日(月・祝)	戦後・大垣市街の復興	
6	2月11日(木・祝)	高木家臣小寺家の近代一家と女性の生き方	辻 公子氏 (岐阜女子大学講師)
7	2月23日(火・祝)	関ヶ原合戦における島津軍の背進 上石津説	三輪 正典氏 (多良歴史案内の会会長)
8	3月22日(月・振休)	古代の美濃国 -西美濃地域を中心として-	亀田 剛広氏(垂井町教育委員会 タライピアセンター学芸企画係長)

◎時間/午後1時30分～3時まで。会場/サイトピアセンター学習館2階 サイトピアホール

当館では、貴重資料(古文書・古籍籍・漢籍など)を所蔵しております。これらの資料を紹介するため、テーマを決めて、館内で展示をしています。今回の展示のテーマは「ハン・カワイ」です。

水墨画をはじめとした日本の絵に描かれている画題(テーマ)には、涅槃図や寒山拾得、源氏物語や松など数えきれないほど多くの種類があります。描かれた絵を見ていると、同じ画題でも作者の描き方によって、ユニークな表現となりどこか不思議な雰囲気のある絵となったものに出会うことがあります。

今回の展示では、戸田氏庸筆「鐘馗」など、当館が所蔵している資料の

大垣よもやまコラム ものがたり大垣城

(16)大垣城の人柱伝説 坂東肇

日本各地には、天守の人柱伝説が多く残っていますが、大垣城にも残っています。ここでは『大垣のむかし話一〇〇話』にあるものを紹介します。

大垣城が造営された時、築城がうまく進まず、人柱をたてようという事になりました。そんな時、旅をしていた六部さんが、ちょうど大垣城の下にさしかかりました。人々は相談の上、六部さんを入柱にして、壁土の中に塗り込めました。六部さんとはどうい

う人かという、仏様を祭った厨子を背負い、黒い布でおった笠をかぶり、小さな鉦をチンチンと打ち鳴らしながら托鉢をして歩く修行者のこととす。

むかし天守の最上階には、六部さんのものだという2m近い金剛杖が細長い箱に入れて掛けてあったといいます。真夜中になると六部さんの霊によるものか、城から鉦の音がチンチンと聞こえ、あたりに響き渡ったといいます。ただ、大垣城は戦争で焼失したため、この金剛杖は現在どこにもありません。

さて大垣城の人柱伝説は、他の多くの城の伝説とは少し違います。まず人柱になった人が男の人であるということと、ふつう多くの人柱は、女の人がなっている例が多いのです。たとえば、郡上八幡城では、江戸時代の初めに城の修理をする時、重要な柱がなかなか建たなかったため、美しい娘「およし」が人柱となりました。その後月日がたち、夜になると石垣の方からかぼそい泣き声が聞こえるようになったといひます。人々は驚いて、城内におよしを祀る祠をつくったと伝えられています。彦根城では、築城の途中でどうしても工事が進まなくなり、普請奉行の娘「おきく」が人柱となりました。彦根城では、決して菊の花は

咲かないと言ひ伝えられました。なお、埋めたのは空の白木箱で、娘は彦根の殿様が密かに助け出していたとも伝えられています。

その他の伝説でみますと、丸岡城では「お静」、長浜城では「おきく」、大洲城では「おひじ」などすべて女性が人柱になっています。

もう一つ大垣城の伝説で他と少し違う点は、多くの人柱は柱や石垣の下に埋められるものなのに、大垣城では壁に塗りこめられていることです。柱や石垣ですと、天守が崩れないようにという理由で埋められたことがわかるのですが、壁に塗り込められたとは、何を意味しているのでしょうか。こうした例は他になく、大垣城の謎の一つです。(次号へ続く)



大垣「水」紀行(10)

杭瀬川には、塩田湊と赤坂湊がありました。

塩田湊は、江戸時代、赤坂湊の中継湊として発展してきました。明治13年(1880)、8月に杭瀬川を往来する船の安全祈願と航路標識、伊勢神宮両宮への献燈として、塩田湊の西側に塩田常夜燈が建立されました。この頃には、常に20〜30艘の船が停泊し、船頭相手の銭湯、米屋、雑貨屋などの店が軒を並べ大変賑わいました。

赤坂湊は、中山道赤坂宿の陸上交通とともに発展してきました。江戸時代、赤坂湊からは、幕府及び諸藩の蔵米(年貢米)の積み出しをはじめ、瓦や材木などが川舟を利用して輸送されてきました。

明治時代になると、金生山の石灰産業の発達と共に製品輸送の舟運が盛んになり、大正時代にかけて大いに繁盛しました。大正8年(1919)に国鉄美濃赤坂線が開通し、昭和13年(1938)に杭瀬川水門ができると舟運は衰退していききました。



大垣を
深めよ!

Gaki
Quiz

第16号(春号)の解答
「飯沼愨齋」



写真 飯沼愨齋著『新訂草木図説』
草部 1875

飯沼愨齋は、伊勢亀山で生まれました。学問を習うため、母方の実家である大垣の飯沼長頭のもとで儒学・医学の勉強に励みました。本草学者の小野蘭山、江馬蘭齋の門人の吉川広簡に蘭学を学び、また、江戸に出て宇田川榛齋・藤井方亭から蘭方医学を学びました。大垣に帰り、蘭方医として開業し、岐阜卓初の人体解剖を行いました。

家督を義弟に譲った後、平林荘(長松町)に隠居し、日本で最初の体系的な植物図鑑『草木図説』を出版しました。

おすすめの1冊

機関誌

「美濃の文化」

美濃文化総合研究会発行



美濃文化総合研究会は、美濃地方における文化の総合的な調査と研究を行ない、文化財の保護顕彰に努めるとともに、相互に便宜を図り協力して、地方文化の振興に貢献することを目的に、昭和53年(1978)11月に設立されました。

その機関誌「美濃の文化」が、装いを新たにA4・カラー刷となりました。今回は、清水進著「揖斐川の川湊の波止場」等郷土に関する研究が収録されています。

3階郷土資料室にてご覧いただけます。